

单士釐の出逢った日仏の女性たち

稲森, 雅子
九州大学大学院人文科学研究院 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/4763195>

出版情報 : 中国文学論集. 50, pp.227-244, 2021-12-24. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

单士釐の出逢った日仏の女性たち

稲 森 雅 子

晩清生まれの女流知識人・单士釐（一八五八～一九四五）は、外交官の夫・錢恂（一八五三～一九二七）に随つて、一八九九年より約十年にわたり、日本や欧州各地を巡った。单士釐は、その見聞体験をもとに詩を創作して手稿詩集を残すとともに、中国人女性として初の海外旅行記『癸卯旅行記』を著した^①。これらの詩文より、彼女が複数の外国人女性と交流していたことが確認できる。このうち、下田歌子や津田梅子ら著名人の名はすでに指摘されているが、なお未解明の人物も残されている。本稿では、これまで特定されていない外国人女性のうち、日本人三名とフランス人女性一名について検討を試みる。

一 单士釐作品に登場する外国人女性

はじめに、单士釐の詩文における外国人女性の記載状況について、整理しておこう（先行研究で未特定の者に傍線を付す。重複して記載される場合は『癸卯旅行記』を優先した^②）。

（1）『癸卯旅行記』^③ 六名

小具貞子（愛住女学校校長）、時任竹子（実践女学校）、河原操子（上海・務本女学校日本語教師）、朝日（錢恂妾）、柳原氏、鈴木陽之助夫人

（2）詩集『受茲室詩稿』等^④ 九名

单士釐の出逢った日仏の女性たち

津田梅子(女子英学塾)、下田歌子(実践女学校)、ベルサ・ボビイ(駐露公使・陸徴祥夫人)、池田信子、小田切夫人桂子、顧梯亥夫人(フランス人)、大鳥夫人、米爾(ドイツ人)、媽達姆蒲西歐(未詳)

本稿では、未特定八名のうち、柳原氏、小田切夫人桂子、大鳥夫人、顧梯亥夫人の四名について考えてみたい。

二 日本人女性三名について

(一) 柳原氏『癸卯旅行記』

柳原氏に関する記載は、『癸卯旅行記』の三月二十日(陽曆四月十七日)の項、二度目の長崎滞在中に見える(傍線筆者、以下同)。

初以爲候船無事、將往此間附近之熊本地方、訪女友柳原氏、一覽彼地名勝與所謂沙中温泉者。豈知如此鮮暇、不能如願、知游福非可輕得(初め以為らく、船を候ちて事無ければ、將に此の間附近の熊本地方に往き、女友柳原氏を訪ね、彼の地の名勝と所謂沙中温泉なる者を一覽せん、と。豈此の如く暇鮮く、願うが如くなす能わざるを知らんや。「遊福」の軽得する可からざるを知る)。

単士釐は、日数不足のため、熊本まで行くことが出来ず、柳原氏と会えなかつたという。にもかかわらず、わざわざその姓を記していることから、両者はある程度親しい間柄であつたと思われる。

この人物について、鈴木智夫氏は「柳原燁子であろうと推測」された。柳原燁子(一八八五〜一九六七、号・白蓮)は、柳原前光伯爵の娘で、叔母の愛子は大正天皇の生母、自身は歌人としても著名である。当時の燁子は、最初の夫・北小路資武、息子・功光らとともに京都に住んでいた。管見の限り、燁子及び前光夫人の初子には、単士釐との接点が見当たらない。また、柳原家、北小路家とも、熊本に縁があるとの記録を見出すことはできなかった。このような状況から、高木氏の推測は妥当と言いがたい。

そこで、あらためて、錢恂の来日時期を中心に、彼の周辺で熊本ゆかりの人物を探索し、柳原又熊（一八六九（？））なる人物を見出し出した。柳原又熊は、熊本市寺原町生まれ。一八九三年頃に上海へ渡り、日清戦争では通訳官として従軍した。一八九六年十一月、漢口の日系誌『漢報』の記者となり、翌年十月には自強学堂（一八九三年、張之洞創設）の日本語教師就任に就任した（一九〇二年七月）。自強学堂では唯一の日本語教師であり、周囲からの評判も良かった。⁶さらに、南京・三江師範学堂でも日本語教師をつとめ（一九〇三～〇六年）、のちに大連で大豆油製造販売事業に従事した（一八九七年）が、その後の消息や夫人の名前は未詳である（待考）⁷。

柳原又熊と錢恂との関係について、西村天因「江漢遡洄録」⁸に参考とすべき記述がある。西村は、一八九七（明治三十）年十二月から翌月にかけて武昌を訪問した。以下は十二月の記録である。

二十五日 柳原又熊來訪、熊本人、現爲自強學堂東文教習。

三十一日 錢恂念劬侍坐。念劬錢塘人、嘗歷游欧州、現爲武備自強二學堂總辦。

西村は、錢恂が武備学堂と自強学堂の事務を取り仕切る立場だと記す。すなわち、錢恂と柳原又熊は同時期に自強学堂に在職していたことになる。しかも、錢恂は、このち日本への留学生派遣事業の責任者に指名され、留学生を引率して日本へ赴くことになった。柳原又熊の在任中、錢恂は日中の間を複数回行き来しており、次第に両者の関係も深まったであろうと推測される。

このほか、柳原又熊夫妻の動向は、「宗方小太郎日記」⁹からもある程度追跡できる。柳原夫妻に関する記述箇所を以下に示す（括弧内は宗方小太郎の所在地）。

一九〇一年五月一日（在上海） 午後篠原祐喜、柳原内君の漢口行を送る。

一九〇二年七月七日（在漢口） 柳原又熊夫婦を若松丸に送る。柳原に托し熊本留守宅に金四十円を送る。

一九〇三年四月二十七日（在漢口） 熊本柳原又熊の信到る。予の推薦により愈南京に赴任する事に決せしと云

単士釐の出逢った日仏の女性たち

ここから、柳原又熊夫人は一九〇一年五月から翌年七月まで武昌に居り、熊本へ戻ったことが確認できる。

では、この時期の単士釐・錢恂夫妻の動向はどうであろうか。『読売新聞』一九〇一年十二月九日朝刊に「清国監督官等の来朝」との見出しで次のように記されている。

南洋湖北留学生官錢恂氏と同行の遊歴官及学生二十五名並に湖北農商務局官員羅振玉氏外十三人ハ昨日午後六時撰州三宮発汽車にて来京せる由又錢氏夫人生徒十二人ハ明日神戸丸にて横浜に来着すと云ふ（五頁）

錢恂・単士釐夫妻は、湖北からの留学生を引率するため、日本から一時帰国し、再び日本へ戻ってきたと記す。つまり、柳原夫人の武昌滞在期間に、単士釐もまた武昌に戻っていたのである。このとき、武昌で両者が面会し交流した可能性は非常に高い。しかも、『癸卯旅行記』で言及された時期、柳原夫妻は熊本に住んでいる。以上のことから、柳原氏は、柳原又熊夫人であると推定される。

なお、砂中温泉は、八代市の日奈久温泉であろうと推測する。潮の満ち引きが大きい八代海の浜辺にあり、湯元は、海中にあったと言われている。江戸時代、細川家の藩営温泉に指定されたこともあり、明治期には、人気の温泉地となっていた。単士釐は箱根温泉を詠んだ詩も創作しており、日本の温泉を気に入っていたようである。柳原夫人から日奈久温泉の様子を聞き、好奇心旺盛の単士釐はこの地を訪ねてみたかったのだろう。

(二) 小田切夫人桂子「謝小田切夫人桂子贈和歌錦袋」

この詩は、遼寧省図書館所蔵『受茲室詩鈔』（李雷輯校『清代閩閩詩集萃編』第九冊、中華書局、二〇一五年、五三〇五〜六五頁。以下「中華書局本」と略称）に収録される七言律詩である。¹¹

風雨蕭條悵旅居

郵筒喜得古人書

松煙落筆瑤池潤

雲錦爲囊霞綵舒

文字能通三國上

交游回遡六年初

重逢祇恐還重別

願賜瑤函藉雁魚

風雨蕭條として旅居を悵みにしに

郵筒喜び得たるは古人の書

松煙もて筆を落とせば瑤池潤ひ

雲錦もて囊を為れば霞綵舒やかなり

文字能く三国の上に通じ

交遊は六年の初に回遡す

重ねて逢へば祇だ還りて重ねて別るを恐れ

願はくは瑤函を賜はり雁魚を藉かん

寂しい旅先の仮住まいに、旧知の女性から和歌を添えた手紙と雲錦柄の袋が届き、単士釐が喜んだ様子が詠まれている。仮住まいとはいえ、荷物が届けられる程度の期間は住所が定まっていたと思われる。従って、創作時期は、ロシア滞在中の一九〇三年秋頃の可能性が高いと考えられよう。

小田切桂子は、上海総領事をつとめた小田切万寿之助（一八六八〜一九三四、字・富卿、号・銀台など）の妻（別名・けい、一八七五〜？）である。父・富永冬樹は旧幕臣で大審院判事、長兄・敏麿はのちに日本郵船取締役となった。夫・万寿之助は、米沢藩の藩儒・小田切盛徳の長男で、一八八六年に外務省へ入り天津へ留学した。一八九七年より上海勤務となり、一九〇二年総領事に昇任した。一九〇五年七月に依願免官となり、同月横浜正金顧問に転じた。漢詩集『銀台遺稿』二卷（錢恂関係作品無）があり、旧蔵書は東洋文庫に所蔵される。

一八九八年七月、万寿之助は武昌に張之洞を訪ねた。以後、万寿之助と錢恂（当時張之洞秘書）は、日本への留学生派遣や漢口の租界地を巡って交渉を重ねた。錢恂自身の留學生監督の任命においても、監督の利権に目を付けた人物の介入があるなど紆余曲折が発生した。このときの外務省の記録には、万寿之助が錢恂に対し「腹蔵なく話した」との記述も見え、交渉を通じ、両者の間に良好な関係が築かれていた様子が窺える。万寿之助は漢詩も創作したから、詩文に通じた錢恂とは仕事以外でも話が合ったのではないだろうか。

単士釐の出逢った日仏の女性たち

桂子は、東洋英和女学校の卒業生である。詩にあるように、日・英・中の三方国語に通じた才媛だったと思われる。単士釐は、来日以降、たびたび夫とともに日中を往復した。その折々、寄港地上海で小田切夫妻と面会したと推測される。ロシア出發前、上海へ立ち寄った際に面会した日本人女性達の中に桂子がいた可能性も高い。¹⁴⁾

(三) 大鳥夫人「贈別大鳥夫人」

本詩は、二種の既刊本には収録されていないため、劉甜甜「單士釐的文學創作與文學活動」(暨南大学碩士學位論文、二〇一九年)の附録三「陳鴻祥『受茲室詩稿』未收詩作」(以下「劉氏論文」と略称)に拠る。¹⁵⁾

共種同洲豈泛常

共種同洲豈に泛常ならん

相逢異域倍情長

異域に相ひ逢へば倍す情は長し

多君勤學交能慎

君の勤學にして交も能く慎むを多とし

愧我無才拙自藏

我が無才にして拙く自ら藏るるを愧づ

惜別驚心聞折柳

惜別心を驚かせ折柳を聞き

舊游回首懷扶桑

旧遊首を回らし扶桑を懷ふ

石麟雛鳳真堪羨

石麟雛鳳真に羨むに堪へ

國勢強由母教良

國勢の強きは母教の良きに由る

大鳥夫人は、外交官・大鳥富士太郎(一八六六―一九三二)の妻、良子(別名・よし、一八七五?)であろう。末尾の一字が「良」であることも、これを示唆しているように思われる。父・斎藤良知は、仙台藩の支藩・片倉家の家臣で、次兄の二郎は、のちに衆議院議員をつとめた。

夫・富士太郎は、戊辰戦争の折、土方歳三らとともに函館の五稜郭に籠城した元幕臣・大鳥圭介の長男である。¹⁶⁾ 富士太郎は、家族を伴い、一九〇三年にオランダ公使館へ赴任し、翌々年ベルギーへ異動、一九〇七年に再びオラ

ンダへ戻った(二等書記官兼第二回万国平和会議随員)。一方、錢恂も同じ年にオランダ大使(出使荷国大臣)として赴任し、第二回万国平和會議に参加した。ここで、両者は知己を得たと思われる。まさに「相逢異域」の状況で、単士釐の日本語能力も活かされて、家族ぐるみの付き合いとなったのであろう。¹⁷⁾ 単士釐は、「石麟雛鳳」、「母教」の語を用いている。母親が教養を高めることにより、家庭教育の質が向上し、ひいては国力強化につながると考えていたのだろう。大島夫妻には四男三女があり、次女・アヤは、芸術評論家・河上徹太郎に嫁いだ。また、オランダ滞在中に生まれた蘭三郎は、医学史の研究者となった。¹⁸⁾

翌年三月、錢恂はイタリヤへ転任した(出使義国大臣、一〇一年一月)。一方、富士太郎は一九〇九年五月に帰国し、同年十月ウラジオストク総領事となる。従って、本詩は大島一家の日本帰国時あたりの作と推測する。

以上、未特定であった日本人女性三名について検討した。これを踏まえて単士釐作品に登場する日本人女性の属性を大別すると、女子教育関係者(下田歌子、津田梅子、小具貞子、時任竹子、河原操子)、家庭内の妾・朝日のほかに、新たに夫・錢恂の職務関係者夫人の一群(柳原又熊夫人、小田切桂子、大島良子)を加えることができる。

三 フランス人顧梯亥夫人について

フランス人顧梯亥夫人への贈答詩は、『中華書局本』に収録されている。外国人女性に対する作品は、一首のみの場合が多いが、本詩は七言律詩の四首連作である。この点から、単士釐が、彼女に対し特別な心情を抱いて創作した様子が窺える。しかし、管見の限り、これまで顧梯亥夫人が誰であるのか、特定しようとする試みはなされていないようである。該当作品「贈法国女子顧梯亥夫人四首」を以下に示す。¹⁹⁾

(一) 欧州閨秀例多能 欧州の閨秀例おまむね多能なれど

學貫中西得未曾

学は中西を貫き未だ曾てあらざるを得たり

一集杜詩知己感

一集の杜詩知己感じ

単士釐の出逢った日仏の女性たち

文章千古結良朋 文章千古良朋を結ぶ

(二) 爲愛東方列女嘉 爲に東方の列女の嘉きを愛し

生憎歌舞競繁華 歌舞の繁華を競ふを生憎す

蕭然獨抱琴書樂 蕭然として独り琴書樂を抱くは

比似吾邦曹大家 吾が邦の曹大家に比似す

(三) 漫擬長安境似仙 漫りに擬す長安の境の仙に似たる

幾經滄海變桑田 幾たびか経たり滄海の桑田変ずを

少陵儻使生今世 少陵儻し今世に生り使めば

只恐傷時淚不乾 只だ恐れん時を傷みて涙乾かざるを

(四) 四德三從古訓推 四德三從古訓推し

泰東女學不崇才 泰東の女學才を崇めず

願君闡發文明理 願はくは君闡の文明の理を發し

誼傑須從母教培 誼き傑は須らく母教より培ふべし

まず、单士釐がフランスを訪れた時期であるが、以下の資料より、一九〇四年末から翌年春頃と推測する。

〔駐俄公使胡惟徳函稿〕致外務部甲辰（一九〇四）十二月二十三日

參贊錢恂到俄以來、此間人事天事、皆是悶損、決意言歸、挽留不獲。現遊德、法、意等國、於明春從容内渡（參贊錢恂は俄に到りて以來、此の間人事天事、皆是れ悶損し、言に帰せんを決意し、挽留するも獲ず。現に德、法、意等の国に遊び、明春從容として内渡せん）。

加えて、单士釐の詩にも、この時期にフランス大使であった孫宝琦（一八六七〜一九三一、在仏期間一九〇二〜

○五)との唱和詩「和夫子與孫君慕韓唱和韻」、「再和夫子述懷仍用前韻」があり、これを裏付けている。²¹⁾

次に、本詩から顧梯亥夫人の人物像を考えてみよう。当時のヨーロッパには珍しく中国文学に通じた才媛で、みずから杜甫詩集を所有するほど杜甫の詩を好み、広く東洋の女性を好んでいた。単士釐は、彼女を曹大家(班昭)に比すほどの才媛であると絶賛している。

さて、フランスにおける中国文学の受容状況であるが、十九世紀後半以降、中国の古典詩が紹介されるようになっていた。まず、中国学者のエルベ・サンドゥニ(一八二二〜九二)が、一八六二年に『唐詩』を刊行した。その五年後、十代の女性が中国詩の翻案詩集『白玉詩書(Le livre de Jade)』を出版し、一九〇二年に改定版を上梓した。その一節は、グスタフ・マラーの交響曲「大地の歌」(一九〇八)にも使用されており(仏語題=李白「磁器の亭」)、『唐詩』とともに、欧州における中国詩受容の基盤を築いたと評価されている。

この詩集の著者は、文豪テオフィル・ゴーチエ(一八一〜七二)²²⁾の娘、ジュディット・ゴーチエ(Louise-Judith Gautier、朱迪特・戈蒂埃、一八五〇〜一九一七)である。彼女は、生涯にわたり、日本や中国に強い関心を抱き続け、和歌の翻訳集『蜻蛉集』²³⁾のほか、東洋に取材した小説、芸術の批評、随筆などを執筆した。このジュディット・ゴーチエこそ顧梯亥夫人ではないだろうか。²⁴⁾

ジュディットは、一八六二年に家族でロンドンの万国博覧会を訪れ、日本使節団の和服姿に衝撃を受けたという。翌年、路頭に迷っていた中国人・丁墩齡を父・テオフィルが雇用、ジュディット姉妹は丁墩齡から中国語を習い始める。ジュディットはすぐに中国詩に関心を持ち、丁墩齡を伴い帝国図書館に通うようになった。さらに、父の勧めもあり、中国詩の翻訳に挑戦し始め、一八六四年に「李太白、杜甫、張若虚、王昌齡、Haori」の詩による中国的主題の変奏」を芸術雑誌『アルティスト』に発表した。ジュディットは、その後も翻訳の発表を続け、これらの習作を纏めて一八六七年に『白玉詩書』を発表した。²⁷⁾

『白玉詩書』について、のちにジュディットは「最も喜んで書いた」と述べたという。本書は散文体七十一首から成る。原詩の作者は、杜甫や李白などであるとするが、原詩が何であるのか判然としない作品も散見されるという。この点について吉川順子氏は、「中国語学習の開始から一年と経たないうちに、訳詩は活字化され始め……ティンの

単士釐の出逢った日仏の女性たち

フランス語能力が十分ではなく、意思疎通に問題があった」ことから、「〈翻訳〉が〈創作〉的側面を持っていた」と分析されている。⁽²⁸⁾

増補改訂版の『玉書』は一九〇二年に出版された。新たに『詩経』や、漢の武帝、高帝、李清照、李鴻章らの三十九首を加え、一百十首となった。追加分は、前年『Revue de Paris』六月十五日号の「中国詩」からの転載であり、従前の作品も不完全ながら翻訳が訂正されている。これは、当時、ジュディットの翻訳を支援した人物がいたことを示唆しているように思われる。詩は、韻文体となりリズム感を生まれたが、なお翻案詩と見做されている。門田真知子氏は「彼女は一つ一つの中国詩の世界を咀嚼した上で、彼女の西洋的世界を訳の上に構築してゆく趣があり」ジュディットのこの中国詩訳はヨーロッパで認容された」と述べられた。⁽³⁰⁾

現在、フランス国立図書館所蔵の『玉書』（初版）がウェブサイトで公開されている。そこには、ジュディット自身ともう一名による詩人名の漢字揮毫があり、随所に配置された中国風の挿図が彩りを添えている。⁽³¹⁾ なお、冒頭には、ゴーチエによるベトナムの咸宜帝への献辞、自叙、次に友人で中国の大臣・裕庚の即興詩がある。

裕庚（？）一九〇五）は、『玉書』出版当時のフランス大使（出使法国大臣、在任期間 一八九九～一九〇二）で、フランス語訳の末の記事より一九〇一年四月の作詩である。『玉書』本篇内には、次男・勛齡（「私を忘れないで」、「朝の露」）、三男・馨齡（「別離」）の作品も収録されている。勛齡はフランスの陸軍学校で写真技術を学んだといわれ、のちに西太后の御用撮影技師となった。台湾の故宮博物院に現存する西太后の写真七百枚余りの大半は、勛齡が撮影したものであるという。フランス国立図書館の『玉書』（初版）に見えるジュディット以外の精緻な詩人名の筆跡と、西太后の写真一枚に付された勛齡・馨齡の署名とは、非常によく似ている。⁽³⁴⁾ 先述のとおり、新たに追加された作品が出版前雑誌に発表されていたことや中国風挿図が増えたことなどと併せて勘案すれば、裕庚一家が何らかの形で『玉書』出版に関与した可能性もあるのではないだろうか。

あらためて、顧梯亥夫人について単士釐詩とジュディットとの符合点について確認してみよう。先述のとおり、杜甫の詩を好むとしたが、『白玉詩書』・『玉書』には、「飲中八仙歌」・「寄李十二白二十韻」など明らかに原詩が杜甫詩と判断できるものが複数ある。また、『玉書』には、先述の李清照の詞のほか、作者名をジュディット自ら漢字

で「楊太真」と記すなど、女性の作品と見做したのも加えられている。加えて、ジュディットが晩年ブルターニュ地方のサン・テノガルディナールに構えた別荘には、中国絵画が多く飾られていたという。これらの点も単士釐詩と符合する。なお、単士釐は「夫人」と記すが、ジュディットは、一八六六年に詩人カチュール・マンデスと結婚し、のちに夫の不義により離婚した経歴がある⁽³⁵⁾。

ジュディットは、若い頃からその才知と美貌で注目を集め、男女を問わず多くの人々を魅了した。週末になると、諸外国の友人知人が彼女の自宅に集ったという。『玉書』には、李鴻章や裕庚の詩があることから、ジュディットは、相当の期間、中国の外交官たちと交流があったと推測される。

このような関係から、単士釐・錢恂夫妻も、ジュディットとの面会に至ったと思われる。両者の対面は、『玉書』の出版から間もない時期であった。単士釐も本書を手に取り、ジュディットと中国の文学について語り合ったのではないだろうか。ジュディットと単士釐は、それぞれ当時の西洋・東洋を代表する才媛の一人であった。両者が対面していたことは、奇跡的な出来事であったと言えるだろう。単士釐の詩から、彼女がこの出逢いに非常に感激した様子が窺える。創作に勤しむジュディット・ゴーチエの存在は、単士釐にとって大きな励みとなったであろう。

おわりに

以上、単士釐が出逢った外国人女性についてみてきた。これまで未確定であった日本人女性三名について、その人物（女友柳原氏、小田切夫人桂子、大島夫人）を特定することができた。彼女たちは、いづれも夫・錢恂が、国外との交渉業務に携わるなかで親交を深めた日本人関係者の夫人であった。単士釐は日本語を学んでおり、これを活かして夫人同士でも交際を深めることは、錢恂が業務を円滑にすすめるうえでも、好影響を与えたと推測される。夫婦同伴での外交は、現在では一般的な形式である。しかし、二十世紀初頭の清朝末期においては、かなり先進的であったと推測される。文才に溢れ、日本語も操り、限られた機会を活かして臆することなく交流につとめる単士釐は、外交官・錢恂にとって、非常に好ましいパートナーであったろう。

単士釐の出逢った日仏の女性たち

また、管見の限り未確定のフランス人顧梯亥夫人について、その詩の創作時期を推定するとともに、女流文学者のジュディット・ゴーチエであろうとの新たな案を提起した。さらに、ジュディットの著わした中国詩の翻案詩集のうち、増補改訂版『玉書』の刊行における当時の在フランス大使・裕庚一家との関係を検討した。当時の西洋・東洋を代表する女性文学者同士の邂逅は、特筆すべき出来事であったと言えるだろう。

他方、単士釐は、これら外国人女性との交流を通じて、女性も教養を身につける必要があるとの認識を深めていったと思われる。今回取り上げた作品の中で「母教」という語彙を二度用いている点からも、女性の教養向上や母親による家庭教育を意識していた様子が窺える。

今後は、下田歌子と単士釐・包豊保（錢稻孫夫人）との関係を検討するとともに、未判明の日本人女性の解明につとめてゆきたい。

注

- (1) 本稿は、話題が清・日本・西欧の複数国にわたることから基本的に西暦を用い、適宜元号を付す。単士釐（一八五八〜一九四五）は、浙江省蕭山の人。字は蕊珠、号は受茲。父・恩溥（字吉甫）は咸豐十二（一八六二）年の挙人、嘉興興学の教諭。光緒十（一八八四）年、錢恂の後妻となる。夫の日本赴任以降の約十年間、日本や欧州各地に赴いた。詩文に長じ、「受茲室詩稿」、「癸卯旅行記」、「清閨秀正始再統集」、「清閨秀藝文略」などのほか、下田歌子『家政学』、永江正直『女子教育論』の漢訳もある。単士釐の文学活動に関する先行研究として、蕭燕婉「単士釐と日本——『受茲室詩稿』と『癸卯旅行記』をめぐって」（『九州中国学会報』第四十五号、二〇〇七年、九二〜一〇六頁）・「単士釐とロシア——一九〇四年の『癸卯旅行記』を中心に」（『中国文学論集』第四十号、二〇一一年、一一九〜一三二頁）、劉又瑄『一位近代女性啓蒙者的身影——単士釐（一八五八—一九四五）作品研究』（花木蘭文化出版社、二〇一一年）、劉甜甜「単士釐の文學創作與文學活動」（暨南大学碩士學位論文、二〇一九年、以下「劉氏論文」と略称）などがある。拙稿「単士釐が来日初期に見た風景——『受茲室詩稿』を手がかりに」（『文学研究』第一一八輯、九州大学大学

院人文科学研究院、二〇二一年三月、一〇三八頁）参照。錢恂（一八五三—一九二七）浙江省湖州府歸安縣の人。幼名は学嘉。号・室名は、頤歩主人、受茲堂主人、積頤步齋など。光緒十三年、薛福成の下で天一閣樓藏書目録編纂に携わり、欧州各地の公使館に勤務。帰国後は張之洞幕下に移り、一八九八年に留学生監督として初来日、たびたび日中間を往復、ロシアへ長期出張した。一九〇七年オランダ、翌年イタリア大使（出仕大臣、一九〇九年離任）。著書に『重訂唐韻攷』、『壬子文瀾閣所存書目』、『二二五五疏』など。その経歴は、高木理久夫編、呉格訂『錢恂年譜（増補改訂版）』（早稲田大学図書館紀要）第六十号、二〇一三年、一〇八—一九五頁）に詳しい。長男の錢稻孫（一八八七—一九六六）は、錢恂・単士釐の長男。父に随い日本へ留学、慶應幼稚舎などで学び、欧州へも随行。中華民国教育部勤務を経て、清華大学教授となり、日本人留学生の目加田誠博士らを自邸に寄寓させた。戦後、漢奸として有罪となる。万葉集や志賀直哉作品など多くの日本文学を翻訳した。

(2) 『癸卯旅行記』は、中国人女性として初めての海外旅行記とされる。一九〇三年春、東京からロシアの首都・ペテブルクまで、約二ヶ月半の旅行記で、旅の途中で見聞きした風景や印象を詳細に綴っている。初版は、一九〇四年東京・同文印刷舎刊。一九八一年に初めて湖南人民出版社より校点本が出版された（以下『湖南点校本』と略称）。これらをもとに、鈴木智夫『癸卯旅行記訳註——錢稻孫の母の見た世界』（汲古書院、二〇一〇年、以下『鈴木氏訳註本』と略称）が出版された。

(3) 現存する単士釐詩集のテキストはいずれも鈔本（括弧内に校点本を示す）で、①羅守巽所蔵『受茲室詩稿』三卷（陳鴻祥校点、湖南文藝出版社、一九八六年。以下『湖南文藝本』と略称）、②復旦大学図書館所蔵『受茲室詩鈔』、③復旦大学図書館所蔵『受茲室詩学吟稿』、④遼寧省図書館所蔵『受茲室詩鈔』（李雷輯校『清代閩閩詩集萃編』第九冊、中華書局、二〇一五年、五三〇—五三六頁、後半部分は①の転載。以下『中華書局本』と略称）の四種。このほか、前掲劉氏論文の附録三に「陳鴻祥『受茲室詩稿』未收詩作」がある。

(4) 『湖南点校本』四〇頁、『鈴木氏訳註本』四七頁参照。当時の長崎—熊本間の鉄道所要時間は約十時間。

(5) 『日本女性人名辞典』（日本図書センター、一九九三年）、宮崎路芝『白蓮——気高く、純粹に。時代を翔けた愛の生涯』（河出書房新社、二〇一四年）ほか参照。

単士釐の出逢った日仏の女性たち

- (6) 放浪生「上海通信」(『朝日新聞(東京)』一八九八年九月六日朝刊、三頁)に「自強学堂の語学教師としてハ柳原又熊氏の名声独り各国教師を凌駕せるあり」と記す。
- (7) 實藤惠秀『中国人日本留学史稿』(日華学会、一九三九年、一八六頁)、『大正人名辞典』(東洋新報社、一九一七年、五六〇頁)、野口宗親「明治期熊本における中国語教育(1)・(2)」(『熊本大学教育学部紀要人文科学』第四八・五一号、一九九九・二〇〇二年、一三三〜一四九・六五〜八三頁)ほか参照。
- (8) 『碩園先生文集』巻三(句読点は筆者)。著者の西村天囚(一八六五〜一九二四)本名は時彦、別号は碩園。種子島の人。帝国大学古典講習科中退後、大阪朝日新聞記者となった。
- (9) 大里浩秋「宗方小太郎日記 明治三四〜三五年」・「同 明治三六〜三八年」(『人文学研究所報』第四七・四八号、神奈川大学人文学研究所、二〇一二年三・八月、四三〜八四・四九〜一一七頁)参照。宗方小太郎(一八六四〜一九二三)は、熊本県宇土市出身の所謂大陸浪人。濟々饗で学ぶと、一八八四年上海に渡り、日清貿易研究所、大日本帝国海軍嘱託を経て、一八九六年に『漢報』を買収、東亜同文会の設立にも参加した。国立国会図書館所蔵の宗方小太郎関係文書は、日中関係史研究の貴重な資料の一つとなっている。
- (10) 「熊本県葦北郡日奈久温泉由来」(『地学雑誌』四十巻七号、公益社団法人東京地学協会、一九二八年、四二五〜四二六頁)ほか参照。
- (11) 『中華書局本』、五三二八頁参照。
- (12) 『人事興信録第八版』(人事興信所、一九二八年)、オ二九〜三〇・ト五一頁、「JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:A11114257800」 故小田切万寿之助位階追陞ノ件(国立公文書館)、「東洋文庫ウェブサイト「小田切萬壽之助」の項」(URL <http://www.royo-bunko.or.jp/ibrary3/shozou/odagiri.html>)、最終確認日〓二〇二二年八月五日)ほか参照。小田切万寿之助は、その後、横浜正金銀行取締役・在清国支店管理、北京駐在総取締役となり、清国への借款、外交条約の締結においても活躍した。一九一七年には岩崎久弥の代理人となり、井上準之助らとともにモリソン文庫の購入交渉に携わり、没年まで東洋文庫初代監事をつとめた。
- (13) 「JACAR(アジア歴史資料センター) Ref:B12081624900」 在本邦清国留学生関係雑纂／学生監督並視察員之部(B3-

10534) (外務省外交史料館) 参照。

(14) 『癸卯旅行記』三月十日に「訪本国女友及東国女友数人」とある(『湖南点校本』三七頁)。

(15) 校点本は注(3)参照。前掲劉氏論文、一二九頁参照。復旦大学所蔵『受茲室詩学吟稿』所収と思われる。

(16) 大鳥圭介(一八三三〜一九一一)は、その後明治政府に出仕し、工部大学校長、学習院長、清国公使などを歴任した。大鳥富士太郎は、外務省退官後、貴族院男爵議員を二期つとめた。大鳥圭介・富士太郎父子は、古洋書の収集家としても知られた。のちに父子の蔵書は、台北帝国大学、天理図書館が購入した。『華族名鑑』(秀英社、一九〇二年)六七七a、『人事興信録第四版』(人事興信所、一九一五年)四九頁、『世界の稀書珍籍を握る 問題の大鳥文庫が三万円で台湾帝大へ買上』(『読売新聞』一九二九年三月二十九日朝刊十頁)、『収館諸文庫一覽』(『天理図書館四十年史』、天理大学出版部、一九七五年、五一四頁)ほか参照。

(17) オランダ赴任には、日本から長男・錢稻孫一家も同行しており一族で交流したと思われる。鄒双双『文化漢奸』と呼ばれた男——万葉集を訳した錢稻孫の生涯』(東方書店、二〇一四年)、二五〇頁参照。

(18) 大鳥蘭三郎『医史学と私』(『日本医史学雑誌』第三十四卷第三号、日本医史学会、一九八八年七月、五〇〇〜五〇五頁)ほか参照。

(19) 『中華書局本』、五三二八頁参照。本詩にも「贈大鳥夫人」詩と同様に「母教」の語彙があり、母親による教育の重要性を主張している。

(20) 原資料は『近代史資料』総九五号、五四頁。前掲「錢恂年譜(増補改訂版)」、一五九頁参照。

(21) 『湖南文藝本』四一頁、『中華書局本』五三二六頁。孫宝琦(一八六七〜一九三一)、字は慕韓。浙江省杭州錢塘の人。錢恂とは早い時期から親しかったという。一九〇二年より出使法国大臣(〇五年)、在任中は自らもフランス語を学ぶ。のちに外交部長、國務院総理などを歴任、中法大学董事長もつとめた。箱田恵子『外交官の誕生』(名古屋大学出版会、二〇一二年)、二一九〜二二〇、二二九頁ほか参照。

(22) テオフィル・ゴーチエ(Pierre Jules Théophile Gautier、一八一一〜七二)は、はじめロマン派詩人として出発したが、のちにこれを批判し、画家や彫刻で表現する美を詩で表そうと「芸術のための芸術」を主張した(高踏派)。詩以外に単士釐の出逢った日仏の女性たち

も幅広く創作し、小説『モーパン嬢』、バレエ台本『ジゼル』、『舞踊評論』など多数がある。

- (23) 『蜻蛉集』は一八八五年刊。ジュディッドは、日本語を解さなかつたため、和歌の下訳は、西園寺公望(一八四九〜一九四〇)が担当、挿絵は洋画・版画家の山本芳翠(一八五〇〜一九〇六)による。
- (24) 門田眞知子『クローデルと中国詩の世界——ジュディット・ゴーチエの「玉書」などとの比較』(多賀出版、一九九八年)、小山ブリジット著・隠岐由紀子訳『東洋を謳う比類ない女流作家ジュディット・ゴーチエ』(『ジュディット・ゴーチエ——日本・中国趣味著作集——』別冊付録、エディション・シナプス、二〇〇七年)、吉川順子『詩のジャポニスム——ジュディット・ゴーチエの自然と人間』(京都大学学術出版会、二〇一二年)、森英樹『フランス文学と漢文学との出会い(その六)ジュディット・ゴーチエの中国詩翻訳(一)』(『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』第三四号、二〇〇七年)・「フランス文学と漢文学との出会い(その七)ジュディット・ゴーチエの中国詩翻訳(二)』(『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』第三五号、二〇〇七年)、蔣向艶『玉書』對中國文學海外傳播的啓示』(『淮陰師範學院學報(哲學社會科學版)』二〇〇九年二期)ほか参照。『白玉詩書』、『玉書』などの著書、肖像写真等は、フランス国立図書館デジタルサイト Gallica に数多く公開されてゐる(URL = <https://www.bnf.fr/>、最終確認日=二〇二二年八月五日)。
- (25) ロンドン万国博覧会の使節団の一員に福澤諭吉(一八三五〜一九〇一)もいた。
- (26) 丁墩齡(一八三一〜一八八六)、山西省平陽府生まれ、十八歳で秀才となるも、父の死を契機に出奔。北京へ向かう途上、食に困窮するも宣教師に救われる。翌年マカオへ随行し十数年滞在。一八六一年、カルリー主教(中国名≡范尚人)の中仏辞書作成の助手となり渡仏したが、翌年主教が死去。間もなくゴーチエ家に雇用された。一八七二年重婚の嫌疑を受けた。そのままパリで逝去、没後の葬儀埋葬はゴーチエが世話した。劉志俠「丁墩齡的法國歲月」(『書城』二〇一三年九月号、上海三聯書店)ほか参照。
- (27) アルフォンス・ルメール社刊、著者名は初期のペンネーム≡ジュディット・ヴァルテール(Judith Walter)。書名は漢字表記に従う。収録詩七十一首の原詩は、杜甫「飲中八仙歌」など十四首、李白「静夜思」など十三首、蘇軾「八声甘州」など七首、丁墩齡二首ほか(吉川氏前掲書「訳詩篇『白玉詩書』」、五五〜九五頁参照)。

(28) 吉川氏前掲書、一一八・一六三頁参照。

(29) 李鴻章(一八二三〜一九〇一)は、一八九六年皇帝ニコライ二世の戴冠式出席後、半年にわたり欧米を歴訪した。フランスにも三週間滞在し、しばしば饗宴が催された。たとえば、祝祝節(新曆七月十六日)の晩餐会には、女性も含む賓客を招いたという(蔡爾康「聘法記」、走向世界叢書『李鴻章歷聘訪歐美記・出使九國日記・考察政治日記』、岳麓書社、二〇〇八年、八〇〜八九頁)。

(30) 出版年、詩人名の漢字表記、新作品の追加、翻訳訂正等の情報は、門田氏前掲書に拠る(四六〜四九頁)。著者名は本名、フランス語の書名は初版と変わっていないが、本稿では漢字表記を用いる。『白玉詩書』に関する評価については、門田氏前掲書九一〜九三頁参照。

(31) 前掲フランス国立図書館デジタルサイトGallicaにより初版を閲覧した(最終確認日二〇二一年八月五日)。なお、漢字の詩人名記載は、『玉書』の初版のみであるという(門田氏前掲書、四六頁)。中国風の意匠は六種八十五カ所、挿図は十三種十四カ所である。このうち、一カ所のみ「同文滬報隨報附送不准男售百美圖第三二頁七月廿五日」と出典を記す。『同文滬報』は、東亜同文会が上海で一九〇〇〜〇八年刊行した新聞。

(32) 咸宜帝はベトナム阮朝第八代皇帝(Thần Tông、ハムギ、在位一八八四〜八五、一八七二〜一九四四)。即位の翌年、抗仏勤皇大蜂起の檄を発し、首都フエを脱出。フランスは兄の同慶帝を立て、帰順を呼び掛けた応じず抵抗を続けた。一八八八年九月フランス軍に捕縛されると、間もなく仏領アルジェリアに配流幽閉となり、現地で没した。中国語獻辭は「咸宜大皇帝何不幸不如當世之諸皇王要其才志宏遠又豈諸皇王可與比哉人莫不哀其遇而其志終不少抑國史書之遠越之前代其將與古載籍垂爲不朽矣聊綴數語用代花獻於以自効其鄙忱耳」(別人の筆)、末に兪第德(ジュディット)と自署する。次頁にフランス語の獻辭あり。

(33) 裕庚の詩は「巴黎奉使歷重瀛、熱海蘇河所次行。兩度願來如有約、卅年迴憶不勝情。猶餘博望乘槎意、慣聽湘靈鼓瑟聲。堪喜詩人能抱古、手持一卷話平生」(裕庚自筆と思われる)。次頁にフランス語訳があり、末尾に一九〇一年四月と記す。裕庚(？〜一九〇五)の本姓は徐氏、字は朗西。漢軍正白旗出身で光緒の優貢生。一八九五〜九八年、出使日本大臣。後妻は、アメリカ人の父と中国人の母の間に生まれたルイーザ・ピアソン。娘の徳齡(一八八五〜一九

単士釐の出逢った日仏の女性たち

- 四四)・容齡(一八八九〜一九七三) 姉妹は、フランスから帰国後、裕庚が没するまで西太后に仕えた。姉・徳齡は、結婚後、夫の故国アメリカに渡り、英語で『清宮二年記 Two years in the forbidden city』など宮廷生活の回想録を執筆した。フランス滞在中、姉妹は著名な舞踏家イサドラ・ダンカンに師事しており、妹の容齡はバレエ舞踏家となった。
- (34) 『読売新聞』「烈女西太后、権勢の日々 故宮博物院の秘蔵写真公開」(一九八八年一月十九日東京夕刊三頁、裕勳齡と記す)、劉心武「時空所捕獲的人質」(『讀書』一九九五年〇一期、生活・讀書・新知・三聯書店、六〇〜六七頁)、台湾・国立故宮博物院「百年回眸 故宮禁城及文物播遷影像特展」日本語ウェブサイト内「慈禧皇太后(西太后)」(URL <https://theme.npm.edu.tw/exh105/PhotoRetrospective/jp/page-2.html#main>、最終確認日二〇二一年八月五日)ほか 参照。西太后の写真は「着團壽肇衣の慈禧」(『紫禁城』二〇一四年四月期、故宮博物院)、一六〇頁を参照。
- (35) 小山ブリジット氏前掲書、九〜一〇頁参照。

※本研究は、JSPS 科研費 JP20K12947 の助成を受けたものです。